



発行所 津市新町3丁目1-1 津高等学校 同窓会事務局 TEL・FAX 059-229-7331 共立印刷株式会社

Table with 2 columns: Article Title and Page Number. Includes '恩師短信', '信州回遊バス同期会', '津中、津高と私', '住めば都、イスタンブール', etc.

21世紀 夢は白くて



年の瀬もおしりまりました。会

員の皆様には各県各地で活躍の こと大慶に存じます。 本年の総会、パーティーも昭和 四十四年、五十六年卒の方々の周 到な準備と献身的な努力の結果、 未曾有の不況下、厳しい諸条件に 拘らず盛大にかつ有意義に成功さ れました。ここに厚く御礼申しま

さて、同窓会報も今回で四十号 となりました。昭和三十九年三月 二十日発行の第一号は四頁白黒印 刷でありました。その後、百周年 記念号の多彩な紙面があり、更に

同窓会長 岡村初博 (昭和15年卒)

現在は十頁のカラー印刷へと充実、 華麗なものとなりました。寄稿者 の方々の顔ぶれも誠に豪華であり まして、国内外で活躍されている 著名な人々であります。今日まで 毎号寄稿者の選定、ご依頼等並々 ならぬご努力をされてこられた編 集委員の皆様にご心から敬意と感謝 を申し上げます。また寄稿された

玉稿は母校、後輩への愛情と励ま しの心情の溢れ溢れた名文揃いで あります。毎号感銘を受けておる ものであります。厚く御礼申しま すと共に今後共変わらぬご協力を お願ひ申し上げます。 尚、蛇足ながら平成五年六月一 十六日発行の「同窓会報縮刷版」 は第一号から三十号までを収録し



タイトル・書「本年度同窓会パーティーテーマ」 千草 光洞 (昭和23年卒) 絵「カフェテラスの人たち」 月輪 清 (津高教諭)

ご挨拶

学校長 水越利幸



会員の皆様には、ご健勝にて、 活躍のごお慶を申し上げます。 平素は、本校教育活動に暖かい ご支援、ご協力を賜り、心から感 謝いたします。 百二十年余の歴史と伝統のある 本校に責任し、その職責の重みを 深く感じているところで、 本校は、県ではトップ(進学美

績)レベルであっても、東横では また全国でどうなのかを我々が 認識を新たに、教科指導を中 心に、如何に充実していくかが 問われています。今年度から完全 学校五日制になっていますが、授 業時間の確保の観点から二学期制 を実施しており、本年度からは六 十五分授業、五限を行っています。 また、昨年度から学校自己評価 として学習指導の充実を中心とし、 シラバスの作成とその効果 的な運用を実践しているところで あります。こうした動きのなかで、 生徒たちは学習はもとより、運動・ 文化部活動、生徒会活動に生き生 きとした高校生活を送っています。

昨今の社会の急激な変化とともに 教職員も変容しなければなりません。本校の教育方針の大きな柱 に「自主自律の精神の育成」が掲 げられていますので、自ら学ぶ生 徒を育み、進学校としての自覚と 誇りを培い、有為な人材の育成を 図ってまいります。 九月に学校評議員をはじめとし た地域の方々を委員として、本校 の将来のあるべき姿を協議する 「津高高等学校教育推進協議会」を 設置いたしました。当協議会から 種々の意見をいただきながら、 本校としてのよりよい教育環境や 教育内容の層の充実を図ってい きたいと考えています。 今後とも、同窓の皆様方のさら なるご指導ご支援をお願いする とともに、皆様方の益々の活躍 をお祈りして、ご挨拶といたしま す。

(九州大学応用力学研究所教授)



海 松野 健 (昭和45年卒)

豊崎に來て沖に見える島山って ど(に)あるのだろうかと思っ ていたところ、最近それは愛知県 側の半島のことかと思ひ至りまし た。え、伊勢湾を泳いで渡るって いう疑問が、この湾の流系はどっ かっていたって(に)どう(に)行 き着くのは、私が海の中の流れや 海水中のモノの動きを理解するた めの科学を専門としているからで しょう。浅瀬のうっとうしい(に) 海は、海面近くの流れだけが問題 とな(で)ますが、海の環境にとっ ては深い方の水の動きも重要です。 伊勢湾では夏の間、海底に近いと ころで酸素が少なくなる現象が起 こります。そこへ沖から酸素に富 んだ冷たくて重い水が侵入してく る(に)初め底近くにあつた貧酸素 の水は外から侵入した水に押し上 げられて中層に漂つ(に)う(に)が 起(こ)ります。やがては周りの水へ と拡散していき(ま)すが、海底の記 憶を持った水が浮き上が(り)てくる 現象と言(う)てもいいかもしれませ ん。

私の勤務している研究所ではも う十年以上前から日本海(韓国で は東海、しかし中国で東海といえ ば東シナ海のこと、殊木が蟹と戯 れたのは津軽海峡、三重県に育つ たものとしてやはり東海は我ら の地方、まあ、それぞれ自分中心 で勝手に呼び方をしているわけ ですが、(に)とも(に)か(に)わ(れ)れば今、 日本海を Japan East Sea と呼ん でいます)の研究に取り組んでい ます。日本海の特徴のひとつは深 層の大部分が非常に冷たい水で占 められている(に)で、海面から二 百米もいけば一度(に)以下の水です。

厚さ二千米以上のほぼ一様な冷たい水は、冬季シベリア沿岸で冷却された水が沈み込んで作られると考えられています。しかしここ数十年は温暖化のためか深くまで沈み込むことがなくな(り)て、水温が徐々に高(な)くなってきて(る)とい(う)現象も報告されています(と)言(っ)ても十年で(に)〇・〇一度(に)という世界ですが、深層に沈み込んだ水はゆっくりと時間をかけて、日本海全体で徐々に表面の方(に)上が(り)てきて(る)と考えられています。 それに要する時間は二十年から三百年、これは大洋規模の大循環のミニチュア版とも考えられています。同じように北大西洋グリーンランド沖で沈み込んだ水が、南極海を経由して北太平洋にまで巡(り)てくる地球規模の循環では二千年を要します。深い海の水が冷たいのはかつて表面で冷やされたから(で)す。若き日に北の海で冷やされた大気(の)記憶を持ち続けて世界を巡(る)あ(る)意味で動くタイムカプセルといえる(に)かもしれませ(ぬ)。地球温暖化はこの巨大な循環を止めてしま(う)かも(し)れない(に)とい(う)ことが言(わ)れています。

恩師短信

思い出すままに

佐脇 功

私は昭和三十八年四月から五十八年三月までの二十一年間、津高に奉職し、お世話になりました。おこがましい言い方ですが教育に情熱を燃やしました。生徒の皆さんも学習に意欲的で素晴らしい学校での勤務、あつとつ間に過ぎました。

昭和三十八年は前年一月一日未明の火災による校舎の復興に同窓会、PTAが尽力され教職員も在任地域で寄付の援助により、ゆとりと風格のある校舎が完成しました。昭和三十八年度は一年生を担当しましたが、体育館を間仕切りした一〇教室と校舎南側に仮設したプレハブの四教室で授業



文化祭
若さと創造の結晶

しました。生徒急増期で一級級五三名の一四級級七四二名。夏は一四級級とも猛烈な暑さでしたが生徒もよく勉強しました。この学年の学習成績は極めて優秀なもので、生徒諸君は大層感心しました。三年生担任の時には体育祭の最後を飾るクラス対抗男女混合リレーで生徒に請われてランカーとして走りまわりました。他のクラスを大きく離して私にバトンが届き優勝でき喜びました。

びくびくのクラブ顧問

小田 海平

当時生徒会の各クラブは顧問を引き受けてくれる教師がいなければ廃部になりかねない。弓道部の村上顧問が他校へ転出後後方が見つかからない。頼まれていやと言えないのを見込んだのか、結局弓道のことを何も知らない私が貧乏くじを引いてしまった。

夏休み中の一日、部員が珍しく運動場で遠的の練習を始めた。夕

青春は戦の中であった

速水 勉 (昭和11年卒)



昭和十一年春、大学受験のため友人と共に上京した時、二二六事件と呼ばれる内戦が起き、落着かぬ気分の中に入試が終わってしまつた。回顧して見れば、津中入学の年に満洲事変が起き、支那事変、第二次世界大戦と昭和二十年まで日本は戦争の渦中であつた。最後の世界大戦では始めから終りまでの四年間軍務にあつたが、全く大変な時代に生きたものである。

昭和十一年の卒業生は昭十五で

このクラブ会を持つていた。誰か名付けたか忘れたが、時代を反映した勇ましい名であつた。世話人が早世したとて、長年、会を開いた事がない。一度集まりたいものである。私の学年では興熊野と呼ばれる地域から私を入れて三名が津中に入學した。まさに後を追つての入學であつた。如て三人は夫々大学に進んだが、二人は戦に若い命を捧げてしまった。今でも風爽とした若い二人の姿が目浮かぶ。私を含めて、生き残っている連中は強靱な体力とか、素晴らしい強運に恵まれた者等であつた。その仲間も皆八十三歳を超えている。私は紀州興熊野で家業の林業に従事している。小さな、尺余りの苗を山に植えて、五十年、百年と杉・松の太木になるように育てる

ました。これは愉快でした。三八年一月に設置された天体望遠鏡で、天文クラブの皆さんと夜星の観測に熱中した思い出。クラブの皆さん、ありがとう。四三年頃から数年間の高校生の政治活動問題も記憶に。五年の創立百年に巡りあい記念行事、事業に参加できた喜びは一人でした。津高並びに津高同窓会の一層の発展を祈念いたします。

感動こそ書の原点

千草 嘉夫 (昭和23年卒)

警備山のふもと、猪苗代湖畔に建つ野口英世記念館を訪れたのは新緑の目にしむ五月なかばでした。ご母屋のシカさんが、英世に宛てた手紙とぜひ一度出逢ってみたいとの夢がやっと実現したのです。文字を書くことのない、いつの中子をおもつ一心から心をこめて一字一字書かれていく様子に心はしびれと伝わってき、久しかりに接するこの感動の心ときどき。

この感動こそ書心を喚起するものであり、書作の原動力として不可欠のものがあると思ひます。

「旅」にでると、不思議と心に

束する仕儀となつた。後任者がきて弓道とのつき合いは三年で終わったが、数年たって今度はラグビー部。やんちゃな連中が多く評判がよろしくなりました。顧問のなり手がありません。最後にやむなく生活指導主任を終えて強面のする私に頼みにきた。こちらの一言二言を聞き、条件をつけて引き受けたものの、ラグビーそのものは教えられる。試合と練習を問わず怪我人が出る。最初の年、伊勢でスクラムが落ち、高校生が首の骨を折って死ぬ事故があったりして、そばで見ていて心配でたまらない。何とかの神頼みで、公式試合の朝早く家を出て伊勢神宮(外宮)に詣で、勝利と部員の無事を祈念したことを思い出す。

懐かしさ今もなお

山鹿 治 (昭和24年卒)

私が、津高に赴任したのは、昭和六十一年でした。以来、退職までの五年間と引続き非常勤講師としての七年間、母校の津高高校でお世話になりました。その間、すばらしい才能をもった生徒諸君と恵まれた環境のもとで、充実した日々を送らせていただきました。全く感謝をしております。

思えば十数年前「津高に入學して」と題して、新入生に感想を書いてもうらた事がありました。そこには、津高は自由な校風とは聞いていたが、自由すぎ自分がかかりしていないと置いて行かれない、自由とは、規制されることよりも辛いことが初めて解つた。そして、自由には「自主」と「自律」が不可欠であることも理解できた。これからの三年間の津高生活は自ら

どろどろと汗ばみ思い出している。開封されることになっていきます。そのとき、わたしの分身在が後輩のみなきと再会できることを楽しみにしていることを思い出します。

由に溺れることとなり、自分自身をしっかりとみつめて、行動してみたなどとの記述に、最初は自由な校風に戸惑いながらも、真の自由とは何か、を把握していく生徒の姿勢に「さすが津高生」と深い感銘を受けたとき、今もなお昨日のように覚えております。

あれから時が流れ、私も七十二歳になりました。現在は、突然「私も結婚しました」との便りに喜び、街角で「先生、お久しぶりです」としてそなたに若い頃の「との声に接し、元気で立派な姿にまたも喜ぶ昨今です。

どうか、同窓生の皆さん健康に留意され、頑張ってください。陰ながら応援しています。では、お元気で。

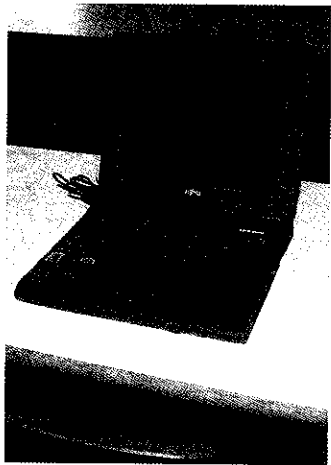
同窓会寄贈のパソコン活躍

視聴覚教室

創立四周年を記念して、同窓会よりノートパソコン42台を寄贈いただきました。これらは現在視聴覚教室に収納棚を設けて保管し、活用させていただいております。当初は英会話学習ソフト「Tall me More」をインストールして生徒が個別学習するさまざまな利用方法を考案しておりますが、校内にLANを構築する際に視聴覚教室にもケーブルを敷いて各クラスターでインターネットに接続が可能になったおかげで活用範囲がさらに広がっております。本年度は、三年生の選択授業「ラルコミュニケーション」で

「Tall me More」の使い方を紹介しました。諸条件が整い次第、昼休みや放課後に自由に利用できるよう開放したいと考えております。また、教員のIT講習にも活用させていただいて、教育現場でパソコンを活用する基盤作りにも役に立ちました。

平成十六年度から入学してくる生徒たちは、新しい学習要領に基づいて教科「情報」を必修科目として履修することになっております。本校では3年次に「情報B」または「情報C」を選択させることにしております。このため、県の予算で1号館3階にパソコン教室を



作って40台のパソコンが設置されましたが、全クラスがスムーズに実習を伴う授業を受けようとするなど、どうしても1教室だけでは厳しい状況です。このたび同窓会から寄贈されたノートパソコンは、新課程で本格的に情報教育が行われるような状況になれば、第二パソコン教室としてフル稼働するのではないでしょうか。県予算が教育に潤沢にまわらない現状で、津高生に充実した学習環境を保障するために、今後とも同窓会のご協力を賜りますようお願いいたします。

津中、津高と私



米本

宏(昭和4年卒)

私は昭和四年津中卒業です。本
 本中学、宇治山田中学を経て、母
 校の教壇に立ったのは十五年四月
 です。新米教師のニックネーム
 「ジャン」の名付け親は当時三年
 生だった十八年卒業生で、英語の
 授業に由来します。戦時下、軍事
 教練があり、伊勢神宮夜間行軍、
 経ヶ峰雪中登山などあったものの、
 学校は案外自由で、生徒が明るか
 かったこと、補習科に通う浪人生
 活がそれなりに楽しかったことな
 ど思い出します。本当に苦しま
 ったのは十九年四月以後で、ま
 前は応召、久居兵舎にいて、終戦

を迎えました。追い出されるよう
 に学校に戻り、先ず知ったのは少
 年航空兵を志願した生徒が戦死し
 ていたこと、二年生の少年連が津
 市爆撃で爆死したこと、満洲から
 の留学生が帰国、安否の程がわか
 らないことなど、心の痛むことが
 多くありました。深刻な食糧事情
 の下、教育改革の嵐にもまねなが
 ら、男女共学が実現し、よく学び
 よく遊びました。閉塞感など微塵
 もなく、夢がありました。運動部
 の活躍がめざましく、野球の田子
 團出場という快挙に湧き、戦前低
 調だった文化活動も軌道にのり、
 私は演劇顧問として、遅すぎた
 青春を生徒とともに楽しんでいま
 した。映画が話題になり、生徒に
 誘われて久居の永楽座や津の新生
 界へ足を運ぶこともありました。
 思えば教師としてまことにとき
 代。

思い出すこと

森田 右 (昭和10年④修)



私は、大正七年生まれ、現在八
 十四歳です。一志郡美杉村で六人
 兄弟の次男に生まれ、六人全員
 (男五人は陳川、妹一人は三重桜
 が津高同窓会会員です。昭和六年津
 中入学から、八高(旧制第八高等
 学校)理科、大阪大学理学部物理
 学科へすすみ、昭和十六年卒業し
 て、九州大学へ就職、福岡で二十
 年三月の後、東北大学へ転任、
 仙台で二〇年、公務員の定年をま
 えに法政大学へ、東京へ移って今
 年で二十一年になる。七〇歳で法
 政大学を定年退職した。大体二〇
 年(とくに関西・九州・東北・東京
 と渡り歩いてきたこと)になる。
 津中では、謙遜そのものの有堀
 市三郎先生が校長だった。生徒の

規則・規制は厳しく、映画館は禁
 止・喫煙店やレストランなどでの
 外食は禁止・異性の交際なども
 ての外、だれかが鯛焼きを買って
 食べていたと、問題になっ
 たことがある。今の自由な高校生
 活とは比べようもないけれど、今
 振り返ってみて「あれはあれでよ
 かったのではないか」という気が
 している。私にしてみれば、八高
 へ入って全寮生活で社会性や自治
 の教養を身につけるとともに青春
 を謳歌し、大学では専門領域を自
 分で決めて自発的な勉強に邁進し、
 全体として結構バランスのとれた
 教育だったと思う。あの頃の
 の大学生って、現在の大学生より
 も、ずっと「大人」だったように
 思うのだがどうでしょうか。

高校受験のとき、理科にするか
 文科にするか迷い、尊敬してい
 たクラス担任の後藤義之進先生
 (フイチャン・英語担当)に相談
 に行った。後藤先生が言われた
 「文科の学問というのは、やろう
 わせも十年以上続き、一年一度
 旅行に出掛け、東京関西方面の仲
 間も合流して東西競演の舞台に立
 ち、七十歳前後の「ジャンの会」
 は修学旅行のような一夜を過ごし
 ます。今年が伊豆でした。学年同
 窓会にも声をかけられたら顔を出
 しています。あるクラス会では、
 私の余りおもろくもなかった授
 業を再現してくれました。みな老
 いゆへ私への励ましで、教師冥利
 に尽きます。しかし、この合せ
 にも一抹の淋しさを禁じ得ない昨
 今となっては、古稀だ、喜
 寿だ、めでたい同窓会でも訃報に
 接することがあり、逆縁の悲しさ
 です。皆さん、卒業生諸君、懐
 ることはない、熱くことはない、

津中三年生から四年生になると
 き、古河の旧校舎から新町の新社
 舎への移転があった。生徒一人一
 人が自分の椅子、机を担いで、餌
 を運ぶ行列がながら、古河か
 ら新町へ移ったのを見て、

人間の脳とは不思議なものだ。誰
 でもそうだと思うが、とつとつ昔
 になくなっていく古河の校舎や新
 町の校舎の配置や教室での自分の
 席の位置まで、今でもはっきりと
 覚えている。
 親が存命中には、ときどき美杉
 村へ帰っていた。その途中、電車
 で津を通過したが、途中下車して
 津の町を歩いたときは、度々なが
 った。私の頭の中には、今も七〇年
 前の津の町が、しかとインプリント
 されたまま焼きついている。若田
 橋の北側にちよつとした広場があ
 り、ここで手品師などの大道芸人
 やバナナのたたき売りがあり、百
 五銀行の、たしか六階建てのビル

が、当時津で唯一の高層(一)建
 築だった。津城址公園は多分変わ
 っていないだろうが、観音様は戦災
 でやけて建て直されたとか聞いた。
 当時、太田書店と別所書店という
 のによく出かけていたものだ。
 一番町の下宿から津新町の駅を
 おって新校舎への通学路は、とこ
 ろどころに家が建っているだけの
 田んぼ道だった。現在、津の町に
 昔の面影がどのくらい残っている
 のだろうか。おそろしく道もわから
 なくなっているだろう。
 (東北大学名誉教授・勲二等瑞宝
 章受賞・フランス政府よりアカデ
 ミー・パルム勲章受賞)

これからも研究テーマを求めて、
 資料調査の日々が続きます。今や
 「老春」「真の盛り」老い込むに
 は時間の惜しい毎日です。
 時の移ろいは早いものです。故
 郷を遠く離れて、東京、大阪に住
 む我々第六十二期生は、今年も年
 一度は有志が顔を合わせ、近況を
 語りながら、残り少ない余生を
 より充実したものにするべく励まし
 合っております。

ただ今『老春』真の盛り

岡本利生(昭和20年④卒)



思い起せば津中を離れてすでに
 六十年近く、ちよつと『激動の昭
 和』の歴史と重なり合ったわが人
 生。思い出は走馬灯のように駆け
 巡ります。
 我々第六十二期生が、胸弾ませ
 て津中の門をくぐったのが昭和十
 六年、その年の暮れには『大東亜
 戦争』が始まり、時代の流れは急
 速に『忠君愛國』撃ちて止ま
 らない。『国防色』染まって行き、我々
 もその中で『軍国少年』として鍛
 えられた。中でも『経ヶ峰雪
 中登山』『伊勢神宮夜間行軍』な
 ど強烈な印象が鮮明です。
 一年生の間は、何とか平穩に授
 業も行われましたが、二年生にな
 ると『勤勞奉仕』『学徒動員』が
 始まり、当初は伊勢中川近頃の農
 家で『暗渠排水』工事などに従事
 しましたが、二学期からは恒常的
 な動員体制となり、江戸橋にあっ
 た三菱航空機の工場で、爆撃機
 『雷電』の翼の生産に携わらま
 した。授業も変則的となり、満足な
 教育を受けた記憶がありません。
 おまけに『戦時特例』で、我々第
 六十二期生のみが強制的に『四年
 繰上げ修了(卒業)』と決まり、
 昭和二十年には、母校を後にしま
 した。その年は、当時の多くの

軍国少年と同じく、軍関係の学校
 に入りましたが、結果的には、殿
 中時代の思い出は数々ありま
 すが、中でも当時の校長、小林徳
 太郎先生の「……さあ……さ
 し……」の言葉が心に響いて残っ
 ております。今振り返って見ます
 と、結果的に厳しい戦時下でのこ
 の津中時代の四年間の『艱難玉』
 『臥薪嘗胆』の生活が、その後の
 私の人生活開の大きな基盤になっ
 ているように思えてなりません。
 戦後の日本経済は大きな混乱の
 中から復興を遂げ、やがて高度成
 長時代に突入、私もその波に揉ま
 れながら、大学卒業の後、民間企
 業に就職、文字通り『夜を日につ
 いて』『猛烈社員』として仕事を
 こなし、実働勤務年数の二倍位は
 働いた感です。やがて定年を迎
 え、一大決断として、定年直前に
 会社を退職しました。そして、当
 時よりよくはじまった『社会人の
 大学編入』制度に挑戦し、論文、
 外国語(二カ国語をそれぞれ面接とい
 う)の試験を何とかへり抜け、晴
 れて京都大学(経済学部)に編
 入学を許され、飢えたように勉強
 に精出すこととなりました。ま
 だ『我、還暦に出陣す』の心境で
 した。初登校した日の、春の陽さ
 しを受けた時計台が眼に焼きつい
 ております。

一歩大学に足を踏み入れますと
 今までの社会人生活とはがらりと
 一変し、別世界が展開します。将
 来の日本を背負って立つてあるう
 孫ほどの世代の学生諸君、そこに
 母國の國造りに燃える近隣諸國の
 留学生(彼らは、難解と言われる
 日本語、さらには慣れぬ日本の
 生活のハンディを乗り越えて、日
 本人学生顔負けの勉強ぶりです)
 の諸君が入り交じり、彼らを指導
 する私も一回り以上年下の新
 進気鋭の教授を中心に、ゼミでの
 白熱した議論、合宿での夜を徹し
 ての交流等々、いずれも老いの身
 に再び血湧き肉躍る活力を与えて
 くれました。彼らの激しい意気込
 みとエネルギーを買って、私も老
 いの身を奮い立たせ、平成十三年
 春、何とか学位取得(経済学)に
 辿り着きました。七十三歳の晴れ
 がましい一幕でした。

津高創立百二十周年 寄付、
 ご協力ありがとうございました

- 34 大橋 孝章 尾崎富美子
- 37 豊田ひさき 野本 幸子
- 40 大橋 陽子 (敬称略)
- 三重校19 田中 敏子
- 津 高26 中井みゆき
- 33 西出 紀子

母校創立百二十周年には、会
 員各位のご協力とご支援によ
 り、一七〇〇万円余のぼろ寄付
 をいただきありがとうございます。
 なお、昨年十月十一日以降に
 寄付いただきました方々の芳
 名を掲載させていただきます、お礼
 申し上げます。

【同窓会へ寄付】
 (この度、維新会(陳川)S6年
 卒)の解散にあたり、一三三、
 三五九円と津高S28年卒から一
 二六、一六二円を同窓会に寄附
 していただきました。
 ありがとうございます。

平穩無事な学生生活 そして白寿を迎えられた長瀬先生

植野 久子 (昭和11年卒)



私達は、昭和六年四月より、昭和十一年三月まで、三重様に在学しました。

その間には、満洲事変、上海事変、五二五事件、二二六事件等歴史に残る大事件がありました。また、昭和九年九月には、吾戸台風にも遭いました。当時は、暴風雨警報が出て、学校は休校にならないので、必死の思いで登校しようとしたが、十歩も歩かない内に、傘がぐちゃぐちゃになっ

て、だんだんでも三十分かかる学校までは、どこも行けません。止むを得ず、近所のお友達をさそって、タクシーで学校へ行きました(校則違反)が、午前中で授業は打ち切りになりました。そしてこの日、半田にあった励精商業の校舎が倒れて、生徒が一人亡くなりました。同じ年、三年になったばかりの四月、東伏見宮妃殿下が、柳山の校舎へおいでになり、私達組の歴史の授業を御覧いただきました。(詳細は、あゝ母校創立百年記念誌に掲載。当時、皇族が学校へ来られるという事は、名譽なこと、学校にとっては、滅多にない大きな行事でした。其の後、日支事変がもたらした大

先生の誕生日の翌日が娘さんの御命日とか、先に娘さんへ亡くされた寂しさはどんなにかと、今更のように思いました。お部屋は娘さんへ過された時のまま、最近朝夕ヘルパーさんの助けをかりながら元気な、お一人でお住まいになり、毎日ご挨拶、日記をつけておられます。生徒の私達もすでに八十歳を越えていますし、人の名前もすべてに思い出せない事もありましたが、先生は六十六年も前の私達のクラスの人々の名前をよく覚えておられます。そして私達の知らない昔の職員室の話を聞かせてくださいます。いつまでもお元気で、長寿の記録を延ばしていただきたいと思つた。

平成も、もう十五年、大正も昭和も足早に遠くなくなってゆくのを感ずるこの頃です。

俳句と私

吉田ゆきる (昭和20年④卒)



津を離れてから五十余年、父も母も叔父も亡くなってゐる

神社を抜ける風の音も、蓮の花が開く音も、角のクリンク屋の蒸気の音も、豊崎海岸の波の音もみんな大切な思い出です。空襲で失った知人や友人の顔、城下町の佇まいは悲しいかなしい思い出です。卒業後、二年の専門課程を経て新町小学校に勤めましたが、その教え子達が昨年会う機会を持つてくれました。みんな遺腹を迎えようとしていました。そして昭和二十四・五年の頃の話を花を咲かせました。戦後間もないことで学校も家庭も何にもない時代でしたが、みんないきいきしていました。二十六年に結婚して東京に移り住むまで、

南町奉行跡と夏蕪、藪椿泡立ちのきりぎりし朝師は「俳句は日記」といわれます。しつかりものを見る、深く感ずる、切れ字はしつかり切るなど折にふれアドバイスを受けました。いい句友に恵まれ、一ヶ月一度のNHK俳句教室や吟行句会を楽しんでおられます。暑い日も雨の日もそれなりの句作が楽しめます。句帳は私の必需品となりました。最近、中学生の孫が私のそばで俳句を作り始めました。小さな歳時記を一冊与えました。そして七夕の夜、関数の問題解けて星祭、祥と詠みました。子供らしい句に微笑しました。これから孫と二人、切磋琢磨しながら七十三歳と七十三歳、手を取りながら歩みたいと思っております。(俳人)

生かされている今

野田 美代子 (昭和14年卒)



昭和十八年九月、戦争中につき半年繰り上げて大阪女子医専(現関西医大)を卒業し、静岡市市民病院に勤務しました。昭和二十一年九月、被災して焼津、三重医専(現三重大)に入局、二十三年結婚と同時に退局、二十四年十月より約二十年間開業致しております。しかし「亡き夫(建築業)の『今を逃したら自分』の思い通りの家が建てられない」との願いを聞き入れ、転居、廃業を決意致しました。

この病院は、脳梗塞、脳出血、クモ膜下出血の後遺症による車椅子生活、消化器腫瘍、心臓病、老人性痴呆、難聴、言葉の出ない人々の長期療養型の病院なのです。食事、排泄、入浴、ナースコールの呼び出し等で多忙の看護士、介護士を目のあたりにし、前記の方々のお話を聞き、心の交わり、支えになればと思っております。回診の時には、脈拍、顔色、手足の動きを視診します。「よく眠れましたか?」「痛いところはありますか?」と聞きま

「先生待っていますよ」と言われる事に、自分が生かされている喜びを噛み締めている今日この頃です。(医師)

芸術を身近に いのちを大切に

岩井 久子 (昭和21年卒)

「ワ」大きな絵、初めてみた50号の絵の前で目を輝かした。「遠出をしないで、こんな身近な会場で格調高い作品が鑑賞できて幸せな気分一杯です」お年寄りや、幼い子ども連れのお母さん、そして、車いすの方たち。「私たちがいつかは...と希望がでて来ましたが、定年間近いお父さん、子育て中の若い人たちが、私たちの街に私たちの芸術を、私たちの街に私たちの芸術を、(堺市の南側、泉北ニュータウン)堺市80万人のうち20万人が住む、その近郊に在住の「堺市展」出品者70人が互いに声をかけ合って開いた「泉北美術展」によせられた嬉しい声でした。会場は、泉北高島屋、他10の専門店が入る大型ショッピングセンター

より年下。その後7月29日は級友、池山さんの死にも遭い「生と死の分かれ目は、戦争とは、いのちを大切にすることを恐れなかった軍国少女の私でした。駅のエスカレーター。一段上を若いお母さんの肩にあごをゆだねて眠る幼子が昇っていきます。私の作品のテーマはいつも「母と子のふれあい、ぬくもり、そしていのちの尊さ」です。いつかえらい先生に「お母ちゃんでしかできない」と言われて嬉しかったことがあります。そう言えば古くは泰正名画の「マリアとキリスト」に始まり、失礼なたとえですが、津駅前「母子像」なども殆ど子どもは前向き、母親なら大切な子どもを前には向けません。卒業後、教職、子育て、姑の介護などで20年のブランクはありましたが、その後30年余、粘土や石膏、樹脂と格闘。結婚するとき主人が贈ってくれたロタンと言葉「美の祭祀だ」とする人達よ。誠実な職人であれ」を生涯の銘として「いのち」を造り続け、「芸術をみんなのもの」と願つ私です。(彫刻家)



「先生待っていますよ」と言われる事に、自分が生かされている喜びを噛み締めている今日この頃です。(医師)

痛みの話から、天候の話になり

信州回遊バス同期会

岡林重次 (昭和20年卒)



野表峠から信州側へ十五キロ、車で二十分の南安曇郡奈川村「温泉口」野表の里」が同期会の定宿である。

集合駅は木曾福島である。第一回から夫婦同伴が勧められていたが、幾分減って単身組が多くなっている。戦後初対面という人がいつも一、二名はいる。

我々六十二期は卒業の年が敗戦の年だから、予科練、特待生昭和世の先駆けとして陸海軍学校への入学者と医者が多いが、大正世代のように戦死者はいない。空襲の犠牲者は出たし、結核は戦後三十年「うま」で死に近づいたが、ともあれ命がながらえて七十七歳を目前に控えた平成七年、湯の山で大同期会が催され、翌年には文集と近況集が編まれ発刊された。さらに十年には名古屋で「タマ」押しの大同期会、そして近況集の続編。以上が郷党幹事連の成し遂げた大事業である。これで一応の打ち止めかと思われた。

もつとも陸海出身者による「山藤堂」に「有造館」という藩校があり有名な斎藤拙堂(藩校督学、侍講)や学者の土井有格、「むらじ」の評判をどうした平松葉斎らが活躍していたからだ。

有造館は徳川斉昭と藤田東湖が手がけた水戸の「弘道館」、長州毛利家の「明倫館」と共に「日本の三大藩校」とうたわれた。

有造館伝統とロマン

前田季男 (昭和28年卒)



「津は天下の文藩」とうたわれ、幕末には大阪の大塩平八郎、長州の吉田松陰、越後長岡の河井継之助が学者、志士が来遊した。津・

水芸という集まりが以前からあったが湯の山のお宿を取っ払って、東京では三月、内幸町の鹿鳴館跡で昼の会食が催されている。郷里の幹事はこの会にも遠路参加して近況など報告してくれていた。

そこへ舞い込んできた信州の旅である。野表の里との由縁を幹事に尋ねたことがある。西穂高で亡くなった甥の一周忌の山仲間集まりに参加したとき、たまたまこの宿を知って立地よきに惚れ込んだという。

幹事魂がひらめいたのではない。か。東西のちよと中間、この宿を拠点として主運転のバスで回遊という構図がおそろしくこのとき描かれたのだらう。

七十台半ばともなればあれこれ体の故障をかかえているものだから、幹事はじめ体躯すくなく脚力衰え

はすっかり忘れ去られた有造館の文字は岩波書店の「広辞苑」からも姿を消している。が、しかし、その伝統を引き継いでいる団体がある。三重一中・津高校ラグビー部のOB会「有造クラブ」だ。

想えば太平洋戦争敗戦の一九四五年(昭和二十年)は津中の海軍兵学校合格者が全員の中学でトップ(陸軍士官学校合格者数も多かった)になり、津の空襲で校舎も炎上した。その翌々年久居市の旧陸軍33連隊跡地に移り、さまざまに混乱の中でラグビー部が復活した。石ころだけの校庭で楯形形のボールを追い、松阪工業高校などと対戦し、同志社などの名門チームの指導を受けた。

隣の津工業高校は津中ラグビー部第三代主将で慶応ボーイ、三重県ラグビー界の草分け野口章先生が津工高ラグビー部を育てた。敗戦後の沈滞ムードを打ち破る青春のウォークライが藩校の伝統とロ

ぬ人も多いのだが、弱卒も一行につき随っているうち自信を取り戻してゆくのである。

上高地、新穂高、乗鞍、車山、白馬、八方尾根、行く先には事故かない。登山といってもロープウェイ、リフトが運んでくれ、思いもかけぬ高所からの眺望を眼中に収めることができる。美術館、博物館も至る所にある。

しかし、どこを走っていてもいいのだ。三日間、同期生、夫人たちだけのバスに揺られての道中は何と気楽なことだらう。小学校以来の友もいる。過去と現実が交錯して、夢のように思える。新緑のなか清流が走り、滝がどどどと。雪峰がきらめき、野狼が駆け回る。宿は親子の夫婦で運営されている。貸切りといっている。露天風呂と自家農園がある。

この秋の第四回は十月二十一日、二十五日だった。来春の第五回も当然あるだらう。

旅好きの幹事によって練り上げられたこの方式は、この宿と主の存在によって初めて可能なのだと納得するのである。

(元新潮社)

マンを培い人材を育んだとも云える。そしてこの有造クラブは全国に散った百余名の仲間をまとめている。名譽会長は野口先生、会長は松浦健、副会長は北海道の名門親でもある三雲町の松浦武四郎の血を引く松浦昭吾、メンバーは近藤康雄津市長、朝日新聞時代に日本一の宮廷記者として名を馳せた岸田英夫、日本経団連会長で活躍中の奥田碩トヨタ自動車会長、加えてオールジャンの司令塔で社会人ラグビーのトヨタ自動車、広瀬の父広瀬貞三、リコーの勝前主将の父勝尚規等々、多士済々である。

私もメンバーであるが、一九五三年(昭和二十八年)津高を卒業同志社に進学したがとにもかくにも高校時代のラグビー野郎が懐かしい。

平成五年県営スポーツセンターが完成、こけら落としに全同同志社全明戦が行われ、そのとき津高

高校時代、卓球にはまっていた私がジャズミュージシャンになるのは夢にも思わなかった。人生どこでどうなるものか分からない。小学生の頃からマリリンバ(木琴)をやっていた私は、中学校の時の音楽の先生の勧めで差入を受け、決意をしたのが、高三の夏だった。卓球一筋だった私はその年、上京。二年間頑張ったが、差入を諦め立音大に入学した。その時はすでにジャズをやる決心をしていた。

人一倍はまり込む性格だったのだから、卒業する頃にはクラブやキャバレーで仕事が出来ると腕前に成長したが、そこから脱皮するのに苦労した。女房の勧めもありクラブの仕事をやめてフリーになったが、最初の三か月間は全く仕事

がなかった。ちよとオイルショックの頃だったと記憶している。いろんな仕事をしながら何とか食いつないだ。三十一歳の時、思いもよらぬ幸運な事が起きた。MJQのピアノスト、ジョン・ルイスと出会い、彼の事を夫然に入ってくれたのだ。翌年ジョン・ルイスに呼ばれてジャズ・フェスティバルに出演する為、初めてアメリカに行った。その頃のニューヨークは、まだあまり治安が良くなくて、信号待ちをしていると、どこからともなく黒人の着いたオライチャが近づいて来て訳の分からない英語でマリファナを売りに来る。最初は何かだか分からないので、恐くなって逃げると、追いかけて来るのだ。お金を持っているように見えたのだらうかとにかく一と言ったまですべてのものは手放した。その時こんな物騒な国には住みたくなかった、とつぶやいた。

このフェスティバルでそう思ったメンバー達と兵隊の事ができ、

自分でも急成長を遂げた気がした。この頃からジャズは私の人生そのもの、という感じになった。ある程度自信をつけて帰国したが、すぐにレコーディングというオマケのピアノスト、ジョン・ルイスとまで付いた。ジョン・ルイスが来日したから、アメリカの黒人ジャズミュージシャンは、ずっと受け継がれてきている伝統という流れがあった。それを若いミュージシャン達がどんどん発展させて来た。その黒人特有のフィーリングに感動した私は、黒人でもないのにそのフィーリングを失わないで自分なりの新しいスタイルを作っていく決意をした。人種差別で虐げられてきた黒人がジャズを演奏している時は、本当に誇りげだ。やっぱりジャズは黒人の音楽なんだ、と思いつ知された。日本のジャズ界はどうかというと、日本人は日本人のジャズをやればいい。当たり前前の事のように聞こえるかも知れないけれど、私にとっては何ともつまらないスイングしないものなのだ。曲の題名じゃないけれどスイングしなきゃ意味がない、というのが黒人達のポリシーであり、私のポリシーでもあるのだけれど、日本のジャズにはそれがあまり感じられない。有名になる事ばかり考えて大事な事を忘れていく人が結構多い。アメリカでは当然巧くてスイングする人が有名になるのだけれど、日本ではほとんど実力は関係ないような気がする。それを評価できる人がいないのも現実だ。とにかく今は実力を付ける事に全力を注ぎたいと思う。たとえそれで名を成せなくても後悔だけはしないでほしい、と思う。

スイングといふ言葉は直訳すると「揺れる」という意味だが、ジャズのリズムは麻薬のリズムなのかも知らない。昔前は多くのミュージシャンがそれをやっていたのは有名な話だ。皆さんが私の演奏を聴いてパワーなりエネルギーなりを感じて楽しんでいただけたら幸いです。ぜひ生演奏を聴きにきていただきたいと思っています。津でも定期的に演奏活動をやっていますよ。一杯やりながら楽しむには、最高の音楽だと言えらるんではないでしょうか。

箱根越え

いやー、ひどい目にあいました。でも、楽しい思い出にもなりました。

三十一年度は毎年関東地区在住者の同期会を催し、今年も第二十九回、九州、関西、三重県内より有志十数名も出席しました。

五月十八日、都内のパーティーを無難に終え、翌日はゴルフ組と観光組に分かれての行動となりました。この観光組十八名が楽しいことに出会ったのです。

新宿より小田原へ、バスで箱根の関所跡への予定が、途中でハイキングコースがあるとの引率者の一声の「それで行こう」で一行

賛同。雨上りのなだらかな山道を歩きはじめたものの、十分二十分すると何となく不安な気分、木の根を足場に進むと、いや登ることに登ることに。

そのうちに隊列は乱れに乱れ息を切らす者続出、引き返すことも来た道を考えればできない状態、進むしかない。「ここは倒れたらどうしよう。救急車も来てくれないし、救助へりも木立が高くてロープが足りるかなア。」驚の暗さ声にさえ「うんうんいなア」引率者はかつて日航機長として世界の空を飛び回っていた青山君、ハイキングコースと登山道の間違えたりしい。地上の操縦は苦手の様だ。

本なら一時間の予定が、まだ中間点。私の服装はと言えはスーツのズボンに皮靴(破れました)。二時間程して「着いたゾー」先陣の声、やれやれも少しと思いきや大詰めの本組の下り階段の段差の大きいこと、足を下ろしても届かぬ程で、中でも短足をなげく女史一人、名前は伏せることにしよう。

道のりは昔に比べると部分的でしようが未開の山道で、先人達はよく往來したのだと感し入り、六十路半ばの大冒険に満足したのでした。

(はまぐち商苑)

箱根越え

箱根越え



大井貴司 (昭和41年卒)

箱根越え

箱根越え

住めば都、イスタンブール

林(デミレル)輝美(昭和46年卒)



三十一一年前に津高卒業後、長い東京暮らしを経て、なぜか今はトルコのイスタンブールに住んでいる。そしてこの原稿は、主人の同親の別荘のバルコニーで、エーゲ海を眺めながら書いている。はるか向こうはトルコの島々をキラキラのレスボ島がみえ、キラキラ光る海には数艘のボートが浮かんでいる。別荘と言っても、日本のリゾート型分譲マンションの上のようなもので、数棟の建物が花の咲き乱れる敷地の中に建ってお

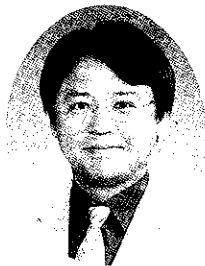
と水の豊富な地域で高原の緑も濃く、牛や羊が放牧されていて、遠く山々の稜線が重なり合い、アブルスの少女ハイジの世界だった。どかな田舎とは打って変わって、イスタンブールは人口二百

万人、二千年の歴史を誇る都である。ボスボス海峡を間に挟み、七つの丘を持つイスタンブールは、私が今まで暮らしたどの町よりも立体的で、ダイナミック。丘の上から、海峡を行き交う船や

ボスボス大橋を眺めるだけで、壮大な、晴れ晴れとした気分になれる。視覚的な変化に富み、昼の顔と夜の顔の違いにドキリとさせられるのである。トルコに来て、もうすぐ六年。その間にバカンスのほかにしたことが言え、一年間のトルコ語学校通い、一年と四ヶ月間のトルコ企業でのアドバイザーの仕事、日本での仕事の経験の本(管理職

机の中の五線紙

伴 剛一(昭和60年卒)



けれど疑り性にして飽き性の僕は、作曲に進むことを断念してしまいました。結果として先生の忠告に背き、五線紙を机の中にしまいいったのです。大学に進学してからも、趣味としての音楽には熱冷めやらず、夏休みともなれば、帰省して、津高の音楽部に足を運んでおりました。当時の音楽部は世代を超えたたぐさんの卒業生が集まる不思議なクラブでした。そんな折、私淑しておりました顧問の稲葉祐三先生のお誘いで、合唱組曲を書かせていただく機会を得、谷川俊太郎の詩集から五篇を抜粋した三十分程の大作をものにしました。運よくこの組曲の第一楽章に準備した小品が、全日本合唱コンクールの課題曲に選ばれたことから、再び作曲に力を入れることになりました。初めて書いた合唱曲は、音楽部の仲間にも好評で、この後、音楽部のために都合四つの組曲をたづづけに献呈しました。作曲科の学生よりもっと自由な作曲実習の場を、提供してもらったことになりました。このうち特に気に入った二作品は後に加筆改訂され、各々作曲賞を受賞し、出版されています。机の引き出しから、再び五線紙を引っ張り出してあげたのは、いつも津高にゆかりのある人たち。僕は津高生だったおかげで、まがりなりにも、作曲家になれました。(三重テレビ放送機)

「終わりのない夢」

松田珠美(昭和52年卒)



人生八十一年という感覚からいえば、自分はまだまだよやや折り返し点に達したに過ぎない。今まで積み上げてきた教師としての経験も、国文学の研究成果も何も通じない世界で、果たしてどうまでやれるだろうか？まだ間に合うのだろうか？それを自分に問うことを決め、考古学の世界に飛び込んだ。

昨年は、自分が担当としてつづけてはなかったが、いくつかの現場を経験した。そんな中で感じた発掘の難しさは、同じパターンは二つとないというところにある。調査対象の遺跡は、時代も違えば地理的環境も違う。土質や土層もさまざまで、埋没が要求される中、でも難しいのは、表土掘削である。遺構面がどれくらいの深さにあるかは、正直言って掘ってみなければわからない。ある程度は試掘データを参考にしても、試掘後の埋土がどんな土で埋められたか、さらには掘りきれないからである。

今年、初めて担当となった発掘調査で、現実にはこの困難と直面した。人の生活跡(集落跡)や建

物跡に比して、道路遺構はより一層判断しにくい。古代の路面は、砂利などを固く踏みしめられたものだろうと想像しながらも、どこからその路面かを見極めるのは容易でなかった。頭も体もフルに使って、調査現場に向き合うしかないのである。

しかし、現場に立っているだけで、充実感が得られるのはなぜだろう。一日中、ほとんど座の間も肉体的にも精神的にも疲れ果ててしまっているはずの中で、翌日への意欲がわいてくる。「ここにはサブリッチを入れてみよう。」「河川跡の下にもう一層面があるかも知れない。」などと考えているうちに、疲れもどこかに消し去

られていく。これも、夢への第一歩がかなえられた手ごたえが感じられるからだろうか。

かつて遺跡調査を夢見ていた頃の情熱が、再び心の中で燃え始めている。おそろしくこの思いは、次のステップへと私を導くパワーとなるに違いない。更なる夢はいまだ残る古代史の謎への挑戦である。今はまだ、伝説の遺跡を発掘するための準備期間にしか過ぎないと考えている。

人生の後半戦。いつの日か、世界の舞台で発掘するのと思いつながら、終わりのない私の夢はさらさらと流れていく。

(埋蔵文化財センター)

また今年は、三重フォークスオーナ創立五十周年のために作曲したオペラが初演されました。二時間に及ぶ、今のところ僕の一番大掛かりな作品です。ボナは稲葉先生が手塚に掛けて指導された三重県内最古の合唱団。三重県文化会館ホールは酒場の観客獲得、大好評を博しましたが、これを機に後進に指揮を譲られる稲葉先生へのはなむけともなりました。

津高に入学してから、二十年が経ちます。迷いながらも作曲を続けてきました。そう、机の引き出しにしまいかけた五線紙を何度も取り出してあげたのは、いつも津高にゆかりのある人たち。僕は津高生だったおかげで、まがりなりにも、作曲家になれました。(三重テレビ放送機)

たなく口数多々経験するだけでは

てみたくなり、一大決心をしてイスタンブールにやってきました。五年前、四十四歳のときだった。トルコへ来て一番驚いたのは、時間感覚の違いである。今日は三つの用事をしようと書いていても一つしか出来ない。誰も急がず、慌てない。ゆっくり、ゆっくり時間が進む。夏になると三ヶ月は海辺の別荘で過ごすという人も多く、イスタンブールは空の家が多くなる。一体三ヶ月間もどうやって別荘で暮らすのかと目を丸くしていた私も、この頃はこのペースに慣れてきて、ひと夏に三、四回、バカンスに出掛けることが当たり前になってきた。この六月にも主人の両親と一緒に黒海地方へ十日間のドライブ旅行に出掛け、ブルシアとの国境近くまで行った。緑

たなく口数多々経験するだけでは

てみたくなり、一大決心をしてイスタンブールにやってきました。五年前、四十四歳のときだった。トルコへ来て一番驚いたのは、時間感覚の違いである。今日は三つの用事をしようと書いていても一つしか出来ない。誰も急がず、慌てない。ゆっくり、ゆっくり時間が進む。夏になると三ヶ月は海辺の別荘で過ごすという人も多く、イスタンブールは空の家が多くなる。一体三ヶ月間もどうやって別荘で暮らすのかと目を丸くしていた私も、この頃はこのペースに慣れてきて、ひと夏に三、四回、バカンスに出掛けることが当たり前になってきた。この六月にも主人の両親と一緒に黒海地方へ十日間のドライブ旅行に出掛け、ブルシアとの国境近くまで行った。緑

たなく口数多々経験するだけでは

てみたくなり、一大決心をしてイスタンブールにやってきました。五年前、四十四歳のときだった。トルコへ来て一番驚いたのは、時間感覚の違いである。今日は三つの用事をしようと書いていても一つしか出来ない。誰も急がず、慌てない。ゆっくり、ゆっくり時間が進む。夏になると三ヶ月は海辺の別荘で過ごすという人も多く、イスタンブールは空の家が多くなる。一体三ヶ月間もどうやって別荘で暮らすのかと目を丸くしていた私も、この頃はこのペースに慣れてきて、ひと夏に三、四回、バカンスに出掛けることが当たり前になってきた。この六月にも主人の両親と一緒に黒海地方へ十日間のドライブ旅行に出掛け、ブルシアとの国境近くまで行った。緑

たなく口数多々経験するだけでは

てみたくなり、一大決心をしてイスタンブールにやってきました。五年前、四十四歳のときだった。トルコへ来て一番驚いたのは、時間感覚の違いである。今日は三つの用事をしようと書いていても一つしか出来ない。誰も急がず、慌てない。ゆっくり、ゆっくり時間が進む。夏になると三ヶ月は海辺の別荘で過ごすという人も多く、イスタンブールは空の家が多くなる。一体三ヶ月間もどうやって別荘で暮らすのかと目を丸くしていた私も、この頃はこのペースに慣れてきて、ひと夏に三、四回、バカンスに出掛けることが当たり前になってきた。この六月にも主人の両親と一緒に黒海地方へ十日間のドライブ旅行に出掛け、ブルシアとの国境近くまで行った。緑

津高進路事情

進路指導部主任 川口 由生

今年4月から公立小・中・高等学校で、完全週5日制になりました。小中学校は、新しい学習指導要領に基づき教育活動がはじまり、来年度からは高等学校でも始まります。今回の学習指導要領の改定においては、「ゆとり」のなかで自ら課題を見つけ、考え、解決する力を育み、「生きる力」を身に付けることが重視されていますが、学習内容や授業時間が大幅に減少したところから、「学力の低下」を心配する声も多く聞かれます。文部科学省が一方では緊急アピール「学力のすすめ」を出して「確かな学力の向上」を唱えていることが、ますます学校現場を混乱させています。しかし、本校では、このような状況のなかでも高い学力を維持・発展させるべく、今年4月から55分授業を始めました。これは、授業時間の確保および授業内容の精選を図り、授業計画として「シラバス」を作成・提示することで、生徒には「自主学習」を促すことをねらいとしています。また、今年3年生からは2年次に類型別クラス編成(類型Iは文系、類型IIは理系)を行い、より一層細やかな進路指導ができる体制を執っています。

さて、本校の大多数の生徒が4年制大学に進学を希望しています。が、大学の変化の早さに進路指導部も驚かされる日々です。大学の構造改革に伴う国立大学の独立行政法人化や統廃合、21世紀「CEO」プログラム、法科大学院構想など次々と新しい事柄が現実として動き出しています。さらに、平成16年度以降の大学入試では、センター試験の5教科7科目目化に伴う受験教科・科目数の増加、またAO入試に代表されるような、大学ごとの入学者受入方針(アドミッションポリシー)に即した高度な問題かつ「生きる力」を求めた今回の新過程の趣旨を踏まえた思考力・総合力・問題解決力を求める入試問題の増加などが起こってきており、こうした大学全体の「流動化傾向」はますます顕著になってきています。進路指導部としても、大学入前、入学後を通じて、学ぶ分野やその学び方について、メニユーの個性化・多様化、自由化が進む流れを的確にキャッチすることが必要であり、この流れを生徒にわかりやすく伝えることが重要になってくると考えています。また、大学・社会の環境変化に対応するだけでなく、生徒の進学

に対するモチベーションを高めるための工夫が必要だと考えております。本校進路指導部では、数年前より「全ての生徒の願いを叶えるために」をスローガンに、学習指導、進路指導両面にわたる3カ年のガイダンス計画を策定し、前年度の反省を生かし、入学生年度ごとのガイダンス教育に力を入れていきます。今年3月を対象に面談週間(4月・12月の2回)を設ける一方で、「なりたい自分をみつめる」ために、その1からその3より成る「自分探しスタート」を企画してきました。この企画の一つ目は「本物を見よう」を見て、聞いて、体験しよう」をサブテーマに、学校から飛び出して、「百聞は一見にしかず」のミニツアーを実施する予定です。今年度はドラゴンジェノミクス株式会社を訪問し、遺伝子解析について学習を深めたこと、②「同時通訳に挑戦しよう」と題して、浅野輝子氏を囲み同時通訳の楽しさ、難しさをわかりやすく話していただいたこと、③三重大学医学部医師体験入学に参加したこと、以上三つのミニツアーを行いました。企画の二つめは文化講演会です。本校昭和54年卒業の国府寛司京都大学大学院理学研究科助教に「数学の魅力」と題して、「研究する」ことの楽しさについてお話を聞かせていただきました。そして三つ目には、今後の企画になりますが、来年2月から3月にかけて学部別・大学別の

受験座談会を予定しています。例年のことながらこれらの企画には、講師の先生はもちろん、その準備段階におきましても、多くの同窓生の皆様大変お世話になっており、卒業生の方々が多方面で活躍なさっているありがたさを感じておられます。ところで、今年3月の進路状況ですが、国立大学の合格者は、300名にせまる勢いでした。現役生の頑張り、自分の志を曲げずに再度挑戦した過年度卒業生達の努力の結果であると思います。国立・私立ともに関東方面への進学者数が徐々に増加してきたこと、海外の大学を目指す者も少なからず見受けられることが最近の傾向としてあげられますが、こうした傾向は今後も続くのではないかと考えております。最後になりましたが、進路指導部の目標は、①ひとりひとりの願いを大切に、②データを活用した進路指導を行う、③自らの能

力・適性について考え、大学で何を学ぶか、社会に出てからどんな職業に就くのかを明確にすることによって自らの高校生活を考えるの3点です。卒業時に生徒全員が「津高校で学べてよかった」と思えるように頑張ってくださいと思います。どうかこれまで以上に同窓会の皆様のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

日本の最北端の地である北海道。十月十日、厳しい寒さと広大な自然への憧れは旅立った。例年、屋久島だった修学旅行が今年度地理的に正対である北海道に変更され、みんなその目を心待ちにしていた。まず印象に残ったのが飛行機による移動だ。初めて乗る者もいて、各々今から始まる三日間に思いをはせながら快適な空の旅を満喫していた。機中から目にした北海道は名古屋などのそれとは全く違い、とても広い大地に多くの自然が残っている。

我々の感覚の中にある十月とは大きく異なり、既に冬が来たのかと思わせるほどの寒さだった。しかし地元の人々はその寒さをさも当然のようにとらえ、さらにはこれから訪れる厳冬に備えているかのように僕はそのとき遙か遠くへやってきたことを実感した。その一日目に訪れたアイヌ文化伝承村では多くのアイヌ式の住居があり、毛皮や彫り物を見て少数民族の文化を身近に感じることができた。しかし同時にこのよつな

文化を追いやってしまったのは和人と呼ばれる我々であり、今もアイヌに対する差別が問題になっているという事実も存在する。素晴らしい文化作品を目の当たりにして将来このよつな少数の人たちといい関係で共存できるような社会を実現しようという気持ちを感じた。そして僕たちが最も楽しみにしていたのが二日目の札幌、小樽の自主研修である。班に別れ、出発前から様々な計画を練っていただけに、多くの人がそれぞれ楽しい一日を過ごせたようだ。数ある観光地をどのようにして効率的に回ろうかとみんなが考えを巡らせた。ガイドや地図に釘付けとなっていた。僕たちの班も札幌でショッピングを楽しんだり小樽でクルーズを楽しんだりしたが、特に時計台や運河などに立ち寄った際にはその活気ある雰囲気を感じた。三日目の開拓村を訪れた時は明治時代のレトロな街並み歩いたり、開拓による様々な文化の融合した施設を眺めることが出来た。特に僕たちが驚いたのは馬車が村中を巡っているのを目にしたときだ。しかも北海道は雪が多く積もるので冬は馬がソリをひくのだと耳にして二度驚いた。今回北海道にて多くの場所を見学したが、大半がのんびりとした雰囲気を感じていた。そしてそれはアイヌの時代、開拓の時代、そして都市としての発展という激しい時代の流れにおける一つの休息地点だったのかも知れない。長き変遷を経てきた北の地には三日程度では知り得ることのできない深い闘争があり、その中で消え去ったものもあったことだろう。二日目の夜に僕たちは藻岩山に登り素晴らしい札幌の景色を楽しんだわけだが、先日の天気予報ではもう雪が降り始めたこと聞く。もう北国では本格的な冬が始まることなのだろう。そして半年近くを真白い世界で過ごすことができたのは長い冬を堪え忍び、短い春を待ち望む心を持っているからだったに違いない。

北の国から02修学旅行

山際 康弘(二年)

読書と美術

片山 一葉(二年)

私が読書感想画コンクールに応募したきっかけは、美術部の活動からです。美術部では毎年指定図書に

書部に応募しています。五冊の指定図書から一冊選びますが、私は「はじまりのことば」という本を選びました。小学校六年生の男の子が周りの人たちの触れ合いを通して成長していく物語です。物語に出てくる「青」のエピソードが印象的で、イメージがすぐに浮かんできました。絵はそのイ

メージに忠実に描き描きました。特に青色の使い方に気を使いました。自分の満足のいく作品ができたと思います。その結果、全国で優良賞という賞をいただき、驚きました。大変嬉しく思っています。

表彰式でもとても貴重な体験をさせていただきました。作者の可能原介さんと、挿し絵の大塚いちおさんにお会いすることができ、しかもしばらくお話しすることもできました。普段作家という職業の方と話す機会もないし、しかも自分が読んで絵を描いた作家さんとお話できるなんて考えてもみ

なかったで、感動しました。皆さんとはいろいろ美術の話をすることができましたが、描くことの喜びと絵に対する愛情の深さを知ることができ深く感銘を受けました。

読書感想画を描いたことで、読書の面でも絵画の面でも成長することができたし、とてもいい経験ができたことに感謝したいと思

います。片山さんの作品は、昨年度の三重県読書感想画コンクールで最優秀賞を受賞し、第13回読書感想画中央コンクールで、応募総数50万点の中から優良賞を受賞しました。

(大学合格者数)

Table with 5 columns: 国立, 公立, 私立, 短大, and rows for H14卒, H13卒, H12卒, H11卒.

(主要大学合格者数)

Table with 24 columns for various universities and rows for H14卒, H13卒, H12卒, H11卒.



私が読書感想画コンクールに応募したきっかけは、美術部の活動からです。美術部では毎年指定図書に

書部に応募しています。五冊の指定図書から一冊選びますが、私は「はじまりのことば」という本を選びました。小学校六年生の男の子が周りの人たちの触れ合いを通して成長していく物語です。物語に出てくる「青」のエピソードが印象的で、イメージがすぐに浮かんできました。絵はそのイ

メージに忠実に描き描きました。特に青色の使い方に気を使いました。自分の満足のいく作品ができたと思います。その結果、全国で優良賞という賞をいただき、驚きました。大変嬉しく思っています。

表彰式でもとても貴重な体験をさせていただきました。作者の可能原介さんと、挿し絵の大塚いちおさんにお会いすることができ、しかもしばらくお話しすることもできました。普段作家という職業の方と話す機会もないし、しかも自分が読んで絵を描いた作家さんとお話できるなんて考えてもみ

なかったで、感動しました。皆さんとはいろいろ美術の話をすることができましたが、描くことの喜びと絵に対する愛情の深さを知ることができ深く感銘を受けました。

読書感想画を描いたことで、読書の面でも絵画の面でも成長することができたし、とてもいい経験ができたことに感謝したいと思

います。片山さんの作品は、昨年度の三重県読書感想画コンクールで最優秀賞を受賞し、第13回読書感想画中央コンクールで、応募総数50万点の中から優良賞を受賞しました。



学年同窓会の「学び舎めぐり」

岡 正基 (昭和24年卒)

私たちが陳川66・三重校47回卒業生は、毎年同窓会を開催してきて...



校周辺(えんま堂、旧津高女塾阿漕塚など)を見学、散策した。...

同窓会の参加人数は、昨年も今年も約百二十名前後、そのうち...

津高へは十二時半過ぎに到着。正門入り口で津中の概要説明、...

大郎歌碑を見学した。何しろ私たちは、津中入學昭和十九年四月...

三重校の

銀杏(実生)に石文

本校の正門横に背丈三メートルくらいの銀杏の樹があります。...

この記念の樹を、卒業生にも後輩にも永久的に知っていただく...

昭和42年卒業生 同期の皆さまへ 毎年2回、5月と11月の第2土曜日...

計報 謹んでご冥福をお祈りいたします。

- 客員 岡南利美 18 松岡 晃 14 長沼(永持)千代子 17 山本(森田)道 17 寺尾(小島)朝子 18 長瀬 晃子 19 北野(三宅)淳子 20 岡田 孝 20 岡田(永合)文子 20 中村嘉代子 20 日比野(太田)逸子 22 徳田(徳田)扇子 24 富田(名越)和代 24 伊達 視 郎 26 浅尾 等 26 稲 葉 律 夫 27 林(野垣内)香代 27 三藤(長谷川)幸子 27 安村(西田)秀子 27 渡辺(勝田)愛子 27 末 崎 千 鶴 28 分 部 順 之 亮 28 竹田(野田)はるみ 28 田 端 経 一 弘 28 和田 光 弘 30 肥 田 久 美 子 30 清水 康 彦 31 清 水 清 子 31 角 田 興 二 晋 成 愈 33 小 菅 野 征 根 36 中 小 羽 根 37 岡 嶋 (岸 江) 峰 正 治 峻 春 孝 38 伊 水 谷 村 良 42 岡 蒲 (浅 野) 加 代 子 43 伊 藤 元 次 英 雄 牧 子 45 伊 藤 副 野 智 文 昭 男 49 小 山 藤 武 昭 男 56 伊 藤 武 松 本 (福 田) 幸 子 高 松 峰 人 H10

皆様は津高同期生の会合を開いていらっしゃいますか？津中時代の先輩から津高を卒業したばかりの若手までが一堂に集う大同窓会も賑やかで楽しいものですが...



同期会を長続きさせるノウハウ

宮村 智 (昭和40年卒)



ですが、第一に、毎年の幹事の外に、メンバー固定の常設事務局を設けたことが挙げられます。...

この外、同期生が予定を立てやすくするために、原則として一月三日の勤労感謝の日を同期会の定例会と定めています。...

以上、生活の知恵のようなものですが、お役に立てば幸いです。最後に、私共の同期会が長続きしている背景には、万年事務局局長役を引き受けてくださっているF君の熱意と献身的な努力があることを一言しておきたいと存じます。(NTT常務取締役)

お知らせ

平成十五年度 同窓パーティー

●日時 平成十五年八月二日(土) 午後三時より

●場所 津センターパレス

担当学年幹事 昭和45年卒(代表 橋本喜久男) 昭和57年卒(代表 田中康一郎)

各地で同窓会開催

九州同窓会

第十三回津高九州同窓会が平成十四年五月二十六日(日)福岡市で行われ、本部より岡村会長・水越学校長にお越しいただき開催することができました。



卒(が)特に呼び掛けて下さり、同期生が四人参加され旧友との再会と一段と盛り上げました。会員談話は「銀行に関する話」と題して日南康夫氏(昭59卒)にお願いしました。景気は明治初期以来50・60年の長期サイクルで、現在は最悪期であるとの説明から、今日一番問題視されている不良債権・ペイオフの諸問題、広範囲に判り易くお話し頂きました。九州の同窓会は沖縄県を含む九州七県と広い地域を有しています。一昨年から鈴木 匠氏(昭16卒)の尽力により、「津高九州同窓会会報」を発行する事が出来ました。今年は村田正文氏(昭22卒)が「熊本での四半世紀」のテーマで熊本名水について専門的な論文

東京同窓会

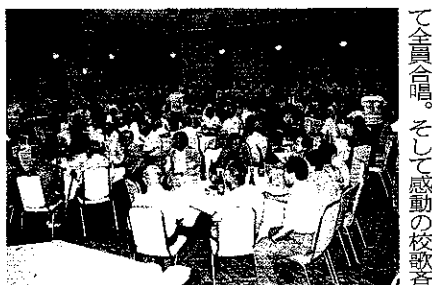
津高東京同窓会は、6月1日東京霞が関ビル東海大校友会館で開催されました。出席者は三重県の昭和11年卒業の方を筆頭に平成14年の卒業生まで約30名とます。の賑わいでした。加藤精一会長のご挨拶を皮切りに、ご来賓の水越利幸校長先生、本部同窓会副会長村田武一様からご挨拶をいただいた後、「招待した恩師を代表して、林先生から近況や最近の学生気質などお話しした

平成十四年度総会報告

実行副委員長 石居 紀子(昭和56年卒)

八月三日(土)、アスト津内ホテルグリーンパーク津において、八百十名の同窓生をお迎えし、平成十四年度津高同窓会総会・パーティーが盛大に行われました。ご来賓の方々のご挨拶をいただき、代議員報告等総会は無事終了。続くパーティーでは、四十四年卒で世界的にも有名なテノール歌手、故山路芳久さんを導き、幹事学年編集による「山路芳久夢を語り継ぐ」が上映されました。本年度の同窓会のテーマは、

「二十一世紀：夢に向かって」。イメージカラーは光輝く明るい未来を象徴する黄色。私たちがまた明るい未来を信じ、共に歩み続けていきたい。その思いを会場の皆様にもお届けできたのではないのでしょうか。二つ目の映像は、世界中に知られる詩・歌をこれら幹事が編集した「青春・夢・そして人生」。同窓生も多く活躍する津奈及会、箏曲演奏にも華を添えていただき、最後は「夢をあきらめないで」を四十四年卒生バンドの演奏にのせて全員合唱。そして感動の校歌斉



平成十五年度同窓パーティー案内

橋本喜久男(昭和45年卒)

日々時間に追われ、あわただしく過ぎていく毎日。先日、何気なく見た道端の風景にあの頃が蘇ります。汗と涙と笑い声……あの頃の思い出に花を咲かせてみませんか? 「あの頃……」をテーマに語り、いっしょに思い出を語り合いたい。皆様のご参加を心よりお待ちしております。



これら総会は終了し、昭和30年卒の藤波耕介様の冒頭に乾杯懇親会に入りました。

会場は、大変なやかな雰囲気であちこちのテーブルから笑い声が聞こえ、皆様それぞれに旧交を温めている様子でした。そして今年入会した高畑美帆様と奥山和彦様のお二人からフレッシュな報告をいただき、最後は恒例の校歌を陳川、三重、津高と青春の思いを込め合唱し、昭和30年



て全員合唱。そして感動の校歌斉唱。折って閉幕しました。

京都同窓会

紅葉の見頃は少し早い十月十七日、第三十六回京都同窓会ホテル平安の森京都で開催いたしました。本部から鳥羽副会長、松井副会長、水越校長、鈴木教諭のご出席を賜りました。総会は、中西副会長の開会の辞、中井会長の挨拶に始まり、来賓の鳥羽副会長、校長先生のご挨拶を頂きました。本部の現況や、母校の勉学、スポーツ、クラブ活動の様子などごわくごわくお話し下さいました。一同母校の発展に誇りを抱いた次第です。三重県の校長先生公募のこともお聞きしました。式次第に沿って、経過並びに会計報告、役員改選等順次進行しました。

名古屋同窓会

平成十四年度津高同窓会は、9月14日(土)名古屋東急ホテルにおいて14名の同窓生を集め、開催されました。総会に先立ち、愛知県美術館美術課長村田真宏氏(津高48年卒)より「美術館の楽しみ方」と題して講演会が行われました。



総会の後、岡田一名古屋同窓会会長の挨拶に続いて、岡村初博津高同窓会会長にご挨拶をいただき、席上、昭和28年津高野球部が甲子園に出場した際に岡氏が監督として出場されたことが披露されました。続いて津高高等学校校長水越利幸先生より津高の現況報告をいただきました。懇親会では、恒例のテーブル対抗津高クイズでも盛り上がり、和やかに旧交を温めるうちに閉会となりました。名古屋同窓会も年々充実し、盛会となっておりますが、若い年齢層の方々の参加が望まれるところです。

大阪同窓会



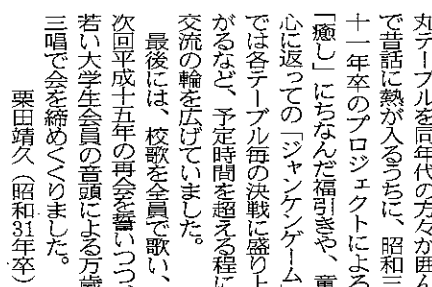
第三十六回津高大阪同窓会は、前日までの寒さが一転し小春日和となった十一月十日(日)、大阪津の三井アーバンホテルにて、本部より岡村会長、長谷川・藤岡副会長、津高から和田教頭先生、恩師の草野・藪内・森田の各先生方をはじめ総勢百五十七名のご出席を頂き、盛大に開催されました。開会に先立ち、この一年の間に亡くなられた十四名の方々に黙祷を捧げ、奥田大阪同窓会会長の挨拶に引き続き、岡村会長よりご祝辞、和田教頭より津高の現況紹介の後、九十三歳になられた草野先生からは在職中の「蘭魔帳」が未だ手元にある等と嬉しいようなお話を頂きました。



来年度は、新春懇親会が二月に総会は十月二十六日に予定しております。大勢の皆様のご参加お待ちしております。

事務局長より

長年会報の編集委員長として同窓会発行に多大のご尽力をいただき、また、同窓会会計としても活躍された松岡 晃さん(昭和18年卒)が昨年暮に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。



津高同窓会ホームページを開いておられます。是非、一度ご覧下さい。ご意見・ご感想等お待ちしております。自由に書き込み出来る掲示板も活用ください。また、リンクを希望の方は、連絡下さい。学年同窓会、独自ホームページを開かれる場合は、同窓会本部のホームページに無いことが、はっきりわかるようにお願いします。

▼事務局開局日は、毎週月火水金の九時三十分～十六時三十分です。よろしくお願ひします。
▼封筒の表に「お願ひ終身会費払込」と印刷させていただきます。方は、同封の振替用紙で二万円を送金下さいませ。お願ひいたします。尚、既に納入いただきました方に、この封筒が届きましたときは、お手数ですが事務局までご連絡下さい。
▼次の諸出版物は、それぞれ残部がありますので、ご入用の方は、同封の振替用紙で、ご注文、ご送金下さい。
○創立百周年記念誌「あお母校」
○その姉妹編「百年祭記録集」
○CD「津高校歌集他」
○会報縮刷版(第一号～第三十号)